

地球という名前の「星命体」

気候変動と安全保障

文 内藤 克彦
text by Kazuhiko Naito

気

候変動は、地球の水資源や農業生産の分布、居住適地の分布に変化をもたらす可能性があり、国際間のストレス拡大や気候難民を発生させる可能性があることが指摘されている。日本では、海洋に囲まれ、地政学的な変化の影響を実感しにくいのが、大陸に立地し、地続きでつながっている国々の間では、このような国際間のストレス増大が認識されつつある。

日本人の常識感からは、そんなことは一部科学者の最悪想定に過ぎない、との声も聞こえそうであるが、米国防省では、かなり前から真剣に検討されている。2003年に米国防省がまとめた報告「急激な気候変動のシナリオと米国の国家安全保障への影響」では、既に、映画『デイ・アフター・トゥモロー』で1年後に描かれたような変化が懸念されている。この報告では、温暖化が起こる証拠は十分にあるが、これまでの変化は緩やかであったとしながらも、「最近の研究では、この緩やかな地球温暖化により、海流が比較的急激に減速する可能性がある」と指摘している。「その結果、現在、世界の食糧生産のかなりの部分を占めている特定の地域で、冬の天候が厳しくなり、土壌水分が急激に減少し、風が

より強くなる可能性がある。準備が不十分であれば、地球環境に対する人間の収容力が大幅に低下する可能性がある」と指摘している。これは、温暖化でメキシコ湾流の速度が低下し、高緯度の割に温暖であった米国東部・欧州の気温が低下し地域的小氷河期を招来する可能性があり、地球の人口収容力の低下、国際緊張を招く恐れがあると警鐘である。米軍は、その後も、米国の陸海空軍+海兵隊の退役将軍からなる軍事諮問委員会を作り、「国家安全保障と気候変動の脅威」という報告を07年にまとめている。例えば、アジア関係では、「世界人口の40%は、飲料水の少なくとも半分を山岳氷河の夏の融解水から得ているが、これらの氷河は縮小しており、数十年以内に消滅する恐れもある。アジア主要河川のいくつかは、ヒマラヤ山脈に源を発している。南極、グリーンランドに次いで世界で3番目に大きいヒマラヤ山脈の巨大な氷床が今後も溶け続ければアジアの多くの地域の水供給が劇的に変化する」と指摘している。さらには17年には米情報機関の連合体である「National Intelligence Council」も「予想される気候変動が米国の国家安全保障に与える影響」により同様の指摘をしている。

07年の軍事諮問委員会の報告で、委員長の元米陸軍参謀総長は、「我々は傍観者で、率直に言って科学の完璧さを求めている」。しかし、「100%の確信など決して得られない。100%の確信が得られるまで待つていたら、戦場では何か悪いことが起きるだろう。これが我々の経験である。不完全な情報をもって行動に移す必要がある」と述べている。こういう感覚は、腰の重い、今の日本の政治家や経済人に欠けているところかもしれない。また、同委員の元海軍宇宙司令部司令官は、「特定の人物や利益団体に納得したのではなく、データに納得したのだ」と言っている。人ではなくデータに基づく科学的判断が必要であろう。

Profile

1953年12月生まれ、400年前からの江戸っ子家系だが、中学までは群馬県育ち。東京大学大学院(物理工学)修了後、環境庁に入庁。温暖化対策課調整官、環境影響審査室長、自動車環境対策課長、港区副区長を経て退官。京都大学特任教授を経て、現在、日本トラッキング協会理事長、東北大学大学院環境科学科特任教授、慶應義塾大学訪問研究員。エネルギー・環境分野が専門。

